リスニングが楽になる! 英文速読術／人間を超えた「アルファ碁」開発者

# CNN ENGLISH EXPRESS

6

THIS MONTH'S SPECIAL FEATURE

- LISTENING ☑
- READING ☑
- SPEAKING ☐
- WRITING ☐

ちょっと手ごわい
でも効果絶大!

［特集］

読めれば聞ける!

## 苦手なリスニングが楽になる!
## 英文速読術

［アンダーソン・クーパー360°］
ヒラリー、サンダース、トランプ
「大統領にふさわしいのは私だ」

［ニュース・セレクション］
オスカー映画『スポットライト』
教会の大罪を暴く不屈の記者魂

［生録インタビュー］
最強棋士を破った「アルファ碁」を開発
天才プログラマー デミス・ハサビス

平成28年6月1日発行（毎月1回1日発行）郵便物第6号（通巻371号）昭和62年7月3日 第三種郵便物認可

# Step Forward

ステップフォワード

## 逆境にいるフィリピンの若者が未来を選べる仕組みを作る

**スカイプ英会話でフィリピンのスラムをサポート**

ワクワーク・イングリッシュCEO
山田貴子

**山田貴子**（やまだ・たかこ）
1985年、神奈川県湯河原町生まれ。2009年、慶應義塾大学環境情報学部卒業。同大学院政策・メディア研究科修士課程在学中の'09年に株式会社ワクワーク・イングリッシュを設立。援助する、されるの関係ではなく、プロフェッショナルな仕事を通じ、生まれた環境に関係なく、誰もが自分の心のワクワクに正直に未来を選択できる社会を目指し、フィリピンにてさまざまなプロジェクトを立ち上げる。慶應義塾大学特任助教も務める。'12年、世界経済フォーラムによって20代、30代のリーダーである「グローバル・シェイパーズ」に選出され、'13年には第1回日経ソーシャルイニシアチブ大賞の国際部門でファイナリストに選出された。


取材・文：仲宇佐ゆり　写真：金子 渡（p.11、p.12）

## >>スカイプ英会話でフィリピンの貧困層の子どもを救う

これから泊まりがけの出張だというのに、荷物はノートパソコンの入ったデイパック1つ。フットワークが軽く、大学生のようにも見えるきゃしゃな山田貴子さんだが、オンライン英会話「ワクワーク・イングリッシュ」のCEOを務める。ビジネスを通じて社会的な課題の解決に取り組み、世界経済フォーラムによって20代、30代の次世代のリーダーからなる「グローバル・シェイパーズ※」の1人に選ばれた。

「生まれた環境に関係なく、自分がワクワクすることに正直に未来を選択できる社会をつくりたい」——そう語る山田さんは7年前、フィリピンのセブ島を拠点にしたオンライン英会話「ワクワーク・イングリッシュ」を設立した。スカイプでフィリピンと日本を結び、フィリピン人講師によるレッスンを提供するもので、顧客は約40社の日本の企業と明治学院大学、京都造形大学、嘉悦大学のほか、個人向けにも展開し、利用者数を伸ばしている。

ほかのオンライン英会話サービスと違うのは、40人のフィリピン人講師の全員が正社員で、オフィスに出勤してレッスンを行う点だ。それによってネット環境もレッスンの質もレベルが保てるし、講師同士で受講者の学習状況の引き継ぎもできる。講師はいずれも大学卒で40倍、50倍の難関を突破した人ばかりだ。

しかし、ワクワークの取り組みはそれだけではない。フィリピン人講師は日本人に英語のレッスンをする一方で、セブ島の孤児院の支援を受けている大学生に英語指導法を教える。受講する大学生には月々の手当が支給され、その半額が大学の学費にあてられる。いわば奨学生制度だ。

「それによって1人の大学生が自活できるようになると、孤児院の予算に余裕が生まれ、新たに3人の子どもを路上から保護できます。セブ島には約400の孤児院がありますが、路上生活をする子どもがまだ大勢います。貧困や家庭内暴力から路上に追いやられる子どもたちに、家と教育の機会を提供できるのです」

※世界経済フォーラムによって任命される33歳以下の若者によるコミュニティーのメンバー。社会に貢献する強い意志を持つ次世代のリーダーたちが世界中から選ばれる。

## >>若者にまいた種から良い循環が生まれる

英語指導法のトレーニングを受けた大学生の中には、ワクワークの厳しい基準をパスしたうえで、日本の小中学生にオンラインレッスンをする人もいる。英語力を生かして就職し、貧困から抜け出した人もいる。例えば、ある卒業生はコールセンターに就職した。初任給が教員の2倍以上という、フィリピンでは大人気の仕事だ。また、アイラという女の子は会計事務所に入り、マネジャーに昇格することができた。彼女はイベントなどの機会にやってきて、ワクワークでトレーニング中の貧困層の学生にアドバイスしてくれる。

「自分の心に正直になり、夢を見つけることの重要性や、周りには罠(わな)がいっぱいあるけれど絶対に落ちてはダメとか、困ったときは第二の家族のワクワークの先生に相談しようとか、学生たちと同じ環境で育った彼女の発言は、私が何か言うよりずっとパワフルなんです」

ワクワークでトレーニングを受けて巣立った学生たちは、毎週土曜日に孤児院や自分の育ったスラムで子どもたちに英語を教えている。すると、それまで夢を持つことすら知らなかった子どもたちが、警察官、エンジニアなど、自分の未来図を描けるようになってきた。

「私たちが学生たちに種をまき、彼らが次の子どもたちに循環させていく。私には、路上生活をしている子どもとタンポポがリンクしているように思えるんです。タンポポはどんな環境でも自分で根を張って黄色い花を咲かせる。そして綿毛を飛ばす。自分の夢を実現するだけではなくて、その姿を次の子どもたちにロールモデルとして見せていく。そのインパクトに私たちは投資しているんです」

## >>「哲学と情熱」が求められるワクワークの講師

このように独自のシステムをとっているため、フィリピン人講師の採用基準もほかのオンライン英会話とは大きく異なる。

「語学学校のスーパーバイザーだった人や10年以上の講師経験がある人でも、なぜワクワークで働きたいのか、この仕事を通じて、どのような未来を描いていきたいのかという点を重視し、情熱と哲学のない人は採用していません。英語を教えるだけならスキルがあればいいのですが、オフィスでの講師としての在り方を、トレーニング中の学生たちが毎日見ることになるからです。結局、採用した人は、自分も教会の支援で学校に行った人、若者を応援したい人、自分が受けてきたことを社会に還元したい人が多くを占めています」

レッスンのない時間には教材を開発したり、学生のトレーニングプログラムを考えたり、みんなで「TED」を見てディスカッションをしたりと、そのモチベーションは非常に高いという。

山田さんは、ほかにもいつくかのプロジェクトを進めている。そ

の1つが「ラーニングジャーニー」だ。フィリピンと日本から参加者を募り、共通のテーマのもと、約10日間いっしょに旅をする。参加した一人ひとりが対話を通じて深くつながり、共に未来を創っていくことを目標にしている。また、スラムの人々の雇用を生むために、子どもたちの親が働ける「ワクママカフェ」をオープン。さらに将来的に子どもたちが働ける美容院の開設に向け、愛知県のNPO法人「ふくりび」と協働で美容トレーニングも行ってきた。

そして今、力を入れているのが、セブ島に建設中のワクワークセンターだと言う。いったいどんな施設なのだろうか。

**Interview»»**

## >> 子どもたちが夢に向かって勉強できるセンターを建設中

**――ワクワークセンターの建設が進んでいるそうですね。**

**山田**　フィリピンで仕事を始めて7周年の今年（2016年）9月9日にプレオープンし、2017年にグランドオープンの予定です。円形の白い建物は、東京都立川市の「ふじようちえん」の設計で知られる、建築家の手塚貴晴さん、由比さん夫妻にデザインしていただきました（ふじようちえんはドーナツ型のユニークなデザインで、日本建築学会賞をはじめ、さまざまな賞を多数受賞している）。センターの敷地はスラムのあるロレガ地区の土地450平方メートルを市から25年間、無償でお借りしています。

1階はカフェと子どもたちが学ぶデイケアセンターで、ここではフィリピン・日本・アジアの子どもたちが一緒に学びます。2階ではITのスキルや美容師などのトレーニングを行い、3階にワクワーク・イングリッシュのオフィスが入ります。カフェの運営や清掃など、雇用を創出する場にもなります。

**――建設地のロレガ地区はセブ島の最貧困地区ですね。**

**山田**　ロレガ地区は悪の巣窟（そうくつ）といわれ、人身売買やドラッグが蔓延（まんえん）していてフィリピンの人々も行かないようなところなんです。公共墓地の墓の上に小屋を建てて住んでいたり、タクシーで「ロレガまで」と言うと、「クスリを買いにいくの？」と聞かれたり。でも住民の一人ひとりは、「明日が今日よりいい日になるといいな」とか「子どもにいい教育を受けさせたい」と思っていて、私たちと何も変わらない。だから、世界中から人々がやって来るような場所にしたいんです。そのためにも、「貧困層だからプレハブでいい」ではなく、一流の空間を作って、中に入ると背筋が伸びて、自分の価値を感じられるセンターにしたい。これが1つのモデルになって、大きなインパクトを生むことができればと考えています。

**――そもそも、フィリピンで仕事を始めたきっかけは何だったのですか。**

**山田**　大学で卒論の準備をしていた2008年に、スポーツを通して路上の子どもたちに何かできないかとフィリピンで半年過ごしました。バレーボールやバスケットボールをして遊んでいると、子どもたちは楽しんでくれたのですが、一人の母親に「あなたと遊んでいたせいで子どもが働けなくて、今日食べるご飯がない」と怒られたんです。自分のやっていることが自己満足でしかないことに気づき、彼らが働ける機会を作らなくてはいけないと思いました。それで大学院の学生のときに起業しました。

上 ―― ワクワークセンターの完成図
左 ―― 横浜市立大学の芦澤ゼミと協働した起業体験プロジェクトをフィリピンで実施している

## >> 英語の先にあるワクワクを大事に

**――このワクワークセンターは市とのプロジェクトということですが、思うようにいかないこともあるのでは？**

**山田**　一時はもめごとやトラブルが続いて、一瞬、こんなに大変ならやめちゃおうかなとも思いました。無理してセンターを建てなくても、どこかスペースを借りればいいのではと考えたんです。オフィスでそんな本音をもらしたら、現地のメンバーから「やっと夢をかなえるときが来たのに、タカがやめたら子どもたちはどうなるの？　タカがやめると言っても、私はやる」と言われ、それで思い直しました。孤児院出身の男の子は、センターができたらそこで働きたいと言っているし、ワクワークのメンバーは私の夢を実現するためではなく、自分たち一人ひとりが起こしたい未来を共に起こすためにいるんです。

**――センターができると、活動も変わってきますか。**

**山田**　今後は日本、フィリピン、それぞれの参加者一人ひとりが、対話を通じて深くつながり、共に新しい未来をCo-Creationしていくラーニングジャーニーがより重要になってくると思います。多くの企業、大学と連携し、実施していくことで、持続可能性のある新しい事業が立ち上がったり、より多くの子どもたちがワクワク学び、夢を実現できるようなインパクトのある仕組みが創造されていくと感じているからです。既に、昨年から横浜市立大学の芦澤先生のゼミと協働し、起業体験プログラムを現地にて実施しており、今後のセンター開設後に実施するプログラムが1つ立ち上がっていきそうです。

フィリピンの路上で生活する貧困層の子どもたちと

## >>もっと話したい、もっと伝えたいから英語を学んだ

**――英語はもともと得意でしたか。**

**山田**　いまだにサバイバル・イングリッシュです（笑）。中学2年生のとき、地元の神奈川県湯河原町の交換プログラムでオーストラリアに行き、2週間ホームステイして現地の学校に通いました。お弁当がリンゴとお菓子だったり、いろいろな文化の違いに触れました。ホームステイが最初だったので、学ぶための英語というより、もっと話したい、伝えたいというコミュニケーションツールとしての英語から入りました。

**――英語の学習で特に効果があった方法などはありますか。**

**山田**　高校生のときに通っていた秀英予備校での関正生（まさお）先生との出会いです。例えば、“Good morning.”という挨拶は、本当は“I wish you a good morning.”、つまり、「あなたの朝がよい朝であるように祈っています」ということだと、文化や背景から教えてくださいました。それ以来、“Good morning.”と言うときに、その思いを言葉に込められるようになりました。前置詞も、暗記ではなく空間認識からin、onなどを説明してくれました。それで長文を読んだとき、単語はわからなくても大体理解できるようになりました。

## >>可能性を広げてくれた先生たち

**――出身地の湯河原、ご自宅のある軽井沢でも活動されていますね。**

**山田**　ワクワーク・イングリッシュの日本の拠点は軽井沢に置き、そこでも地域の方々に支えられて活動をしています。湯河原では学校に行けない子どもたちのための適応指導教室で、月に1、2回、フィリピンとスカイプでつないで英会話のレッスンをしています。対人コミュニケーションが苦手な子は、目の前にいる人とは話しにくいけれど、パソコン画面越しにフィリピンの先生と話すのはちょうどいいみたいなんです。学校を卒業したとき、スカイプで先生にお礼を言いたいと言う子もいます。英語だけではない関係性ができるのが私たちの授業の特徴ですね。自分の可能性を信じられない、自分に価値がないと思っている日本の子どもたちにレッスンを届けることで、日本とフィリピン相互にとってプラスにできるのではと思っています。

**――山田さんご自身はどんな子どもだったのですか。**

**山田**　小学校低学年の頃は、授業でもあまり手を上げない子だったのですが、小学3年生のとき、担任の先生が「きっとできるから」と児童会に入ることをすすめてくれました。それで組織の中で活動することによって自分の可能性がすごく広がった原体験があります。中学、高校でも可能性を広げてくれる先生に出会いました。だから自分も相手を最後まで信じて、可能性を引き出す人でありたい。本人が自分には可能性がないと思っていたとしても、私は相手を信じる――最後まで信じてくれる人がいるかいないかが大きいと思うんです。

**――本当にパワフルですが、その原動力はどこから？**

**山田**　フィリピンの子どもたちと出会い、そのお母さんに怒られて起業してから、2019年までの10年間はどんなにつらいことがあっても絶対にやると決めたんです。10年後には当時の子どもたちが大学に入るぐらいの年齢になっています。そのときワクワークセンターがあることで、生まれた環境に関係なく、自分の未来を自分で選択できるようになっているのが1つのゴールです。

## >>日本の子どもたちにも還元したい

**――やりがいを感じるのはどんなときですか。**

**山田**　人身売買の被害者で、助け出されて今はワクワークでトレーニングを受けている大学生の女の子が、支給されたお金を母親に取られて交通費がなくなり、もうここに来れない、と泣いていたことがありました。でも彼女は、自分はワクワークファミリーの一員だから、来なきゃいけないんだと言うんですね。みんなワクワークを自分の居場所と考えてくれていて、この場があることが重要なんだと感じました。私がセンターの設立に駆け回って、しんどくてオフィスの廊下に座っていると、そんなみんなの声が聞こえてきてエネルギーをくれるんです。彼らと触れ合うことで、自分のエネルギーをどこに使うことが自分にとって喜びなのかがわかります。

**――今後の活動は？**

**山田**　今、時間的にはフィリピンと日本にいる割合は6対4ぐらいです。今後は日本の子どもたちにもっと還元していきたいと考えています。例えば、自分の可能性を自分も信じられないし、社会からも信じてもらっていない子どもたちをセブ島のワクワークセンターに連れていく。湯河原ではいろいろな年齢の子どもたちが交流できるような居場所を作り始めています。